

# 日本語教育における他動詞の捉え方の問題と 教育上の提言

—日本語教師 25 人のアンケートから見えるもの—

Comprehending Transitive Verbs in Japanese Language Education  
-Recommendations Based on a Questionnaire to Japanese Language Teachers-

山田 勇人\*

Hayato Yamada

本稿は日本語教師が自動詞と他動詞の違いをどのように捉え、また、どのように学習者に指導しているのかアンケート調査を行い、指導の特徴及び問題点を明らかにしたものである。調査の結果、日本語教師は他動詞を、働きかけがある動詞だと捉える一方、指導上は動作主の存在などに焦点を置いていることが明らかになった。しかし、この指導方法は、日本語学習者の自動詞と他動詞の選択に関わる誤用を誘発する原因となる可能性があることが分かった。

**キーワード**：日本語教師、他動詞、自動詞、動作主の有無、動作主の意志

## I. はじめに

動詞の一分類として、自動詞と他動詞という概念が存在する。この自動詞と他動詞は、日本語教育の現場でも用いられる概念であり、重要な指導項目<sup>1)</sup>の一つと捉えられている。そして、これは構造シラバスの教科書であれば、一般的に初級の中盤に導入されることが多い<sup>2)</sup>。

しかし、この自動詞と他動詞の概念は学習者にとって容易ではない文法項目であるのと同時に、教える側の教師にとっても指導が難しい項目だとも言われている。そのためか学習者の作文においても、自動詞と他動詞が原因の誤用は多く見られる。

ところで、この自動詞と他動詞に関する誤用は、学習者の理解不足から起きているのだろうか。この点について、筆者は学習者の誤用は必ずしも彼らの理解不足から起きているとは限らないと考えている。近年、学習者の誤用の一因として、教師誘導による誤りが指摘されている<sup>3)</sup>。これは、教師の説明の不十分さが学習者の理解や言語の産出に影響を与え、誤用を生じさせたものを指す。

---

\* 流通科学大学経済学部, 〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

学習者の自動詞と他動詞に関する誤用も、教師誘導による誤りが一因となっていることは考えられないだろうか。

そこで、本稿では現場の日本語教師の自動詞と他動詞の捉え方、及び日本語教育の現場における自動詞と他動詞の扱いについてアンケート調査を行い、指導上の問題点を考えたい。これは、決して日本語教育の現場における自動詞と他動詞の指導方法を批判的に論じることが目的ではない。日本語教育の現場での指導方法の現状を把握することで、学習者の誤用の原因や指導上の改善を建設的に提言するための一過程であると捉えてほしい。

## II. 学習者の自動詞と他動詞に関する誤用例

実際に自動詞と他動詞に関してどのような学習者の誤用が見られるのだろうか。以下は、「日本語学習者作文コーパス<sup>4) 5)</sup>」から検出した自動詞と他動に関する誤用を含んだ文である。下線部分が自動詞と他動詞に関する誤用である。

- ・そして、たくさんの単語と文法を覚えた後、私たちは自分の水準が上手になると感じられる。最後、私たちは外国人と交流するチャンスを増加する。(中国・上級)
- ・これ以上、外国語をうまくなる方法は、一この国の文化を深まること、二つは訓練を多くなること、大分そういうことだろう。(中国・中級)
- ・けれども今われわれが新たな世紀に入ると同時に、環境保護という議題も大切になってきます。これから紙の用量を減るために、新聞や雑誌の量をだんだん減らしべくとも考えています。(中国・中級)
- ・作文を書くとか、日常の話すとか、日本語の小説を読むときに、豊かなボキャブラリーが必要だ。以上のほか、しょっちゅう日本の文化を接触してもいい。(中国・上級)
- ・韓国は日本語を勉強している人が多い。その人々を見ればだいたい学校で学ぶことが一般的である。ほかにどんな方法で日本語を接するのか。(韓国・初級)
- ・勉強の効率は上がることができる。(中国・初級)
- ・私はまだ日本語がとても上手だとは思いません。まだ学ぶこともたくさんありますけれども日本語のべんきょうをはじまる人に勉強のやりかたを教えてあげてと言われたら日本語のことをいつでも考えることです。(韓国・上級)

学習者の自動詞と他動詞に関する誤用は一様ではない。筆者は、誤用を2つのパターンに大別する。

(a) 自動詞と他動詞の形態の誤り

(b) 自動詞を使用すべき箇所に他動詞を使用している誤り、またはその逆の誤り

(a) に関しては、本来使うべき自他が分かっているものの、自他の形態が複雑なゆえに生じた誤りである。筆者は「もうすぐパンが焼きる<sup>6)</sup>」と記述した学習者の作文を目にしたことがある。

どういう意味か学習者に尋ねたところ、「焼く」という他動詞に対応する自動詞は「焼きる」だと勘違いしたと学習者は答えている。また、自動詞と他動詞の形態を逆に覚え、「パンが焼いた」のような誤用もこのパターンに含む。この誤用は、自動詞と他動詞のどちらを使うべきなのかは理解しているが、その形態を誤ったものである。これは、日本語における自動詞と他動詞の形態は一定の規則<sup>7)</sup>は存在するものの、その複雑さから結局のところ学習者は暗記せざるを得ないため、誤用が多発すると考えられる。また、本稿では論じないが、漢語動詞に多く見られる自他両用動詞の問題<sup>8)</sup>もある。

(b) は自動詞を使うべきなのか他動詞を使うべきなのかで混同が起きており、まさに自動詞と他動詞の選択に関する誤りと言える。例えば、「彼女は涙が流れて、喜びました。」(中級、中国語／筆)<sup>9)</sup>のような誤用である。ほかにも、鍵がかかっているドアを開けようとして、「ドアを開けない」としてしまう誤り<sup>10)</sup>もこのタイプの誤りと言える。これらの誤用は、自動詞と他動詞の形態を誤ったわけではなく、そこで用いるべき動詞が自動詞なのか他動詞なのかが分かっていないために生じた誤用である。

日本語の自動詞と他動詞は、その形態の異なりが複雑であり、これに起因する誤用 (a) は確かに少なくない。しかし、本稿では (b) の誤用に関して主に考察を行っている。というのも、個々の語の形態をきちんと覚えたところで、どの場面で自動詞を使い、どの場面で他動詞を使うのかといった自他の選択ができなければ、話し手が本来言いたいことが伝わらなかったり、間違った意味理解がなされたりする可能性が生じるからである。また、形態の指導・方法は学習者の丸暗記に頼る部分が多い。そのため、記憶する困難さは認められるが、教師誘発の誤用は起きにくいと考えられる。一方、自動詞と他動詞の選択に関しては、もし教師の説明自体にそもそもの誤りがあれば、学習者のアウトプットに大きな影響を及ぼすだろう。

では、この自他の選択について、もっと言えば、自動詞と他動詞についてどのような説明、指導が行われているのだろうか。次の章では、この点について述べたい。

### Ⅲ. 日本語教育における自動詞と他動詞の指導法について

#### 1. 日本語教師用・日本語学習者用参考書等の記述

最初に、日本語教師用・学習者用の参考書等には自動詞と他動詞についてどのような記述があり、どのような点に指導の焦点が置かれているのか考えてみたい。現在、多くの日本語教育のための文法書が出版されているが、ここでは以下のものを取り上げる。

- ① 『step 式日本語練習帳 自動詞・他動詞』松本節子他著、UNICOM (以下、『step 式』)
- ② 『みんなの日本語Ⅱ 教え方の手引き』石沢弘子他著、スリーエーネットワーク (以下、『教え方』)
- ③ 『日本語の教え方 ABC』寺田和子他著、アルク (以下、『ABC』)

④『考えて、解いて、学ぶ日本語教育の文法』原沢伊都夫著、スリーエーネットワーク（以下、『考えて』）

⑤『日本語文法演習 自動詞・他動詞、使役、受身ーボイスー』安藤節子、小川誉子美著、スリーエーネットワーク（以下、『ボイス』）

『step 式』では、自動詞と他動詞について、その特徴として次の点を挙げている。自動詞の文は、1. 意志を表さない 2. 人間の意志でコントロールできないことを言い表す 3. 目の前で起きていることをそのまま言い表す 4. 「～が」＋「自動詞」の形をとるという 4 点があり、他動詞の文は、1. 意志を表す 2. 「～する」ことを言い表す 3. 「目的語」＋「～を」＋「動作を表す動詞」の形をとるという 3 点である。

初級教科書の『みんなの日本語』の教師用指導書である『教え方』では、次ように説明されている。<sup>11)</sup>

この課(29課)は自動詞がたくさん提出される。既に学習した他動詞との違いは(教師が)実際にドアを開けたり、エレベーターのドアが自動的に開いたりするところを見せたりして、理解させる。また、ここで扱う動詞の多くが瞬間的に終わる動きを表すものであることにも注意させる。

このように『教え方』では「実際にドアを開ける」「自動的に」という文言からも、自動詞は自動的に発生したものであり、他動詞は動作主が存在し、誰かがした動作である点を重視していることが分かる。

『ABC』では、指導上のポイントとして自動詞と他動詞との違いを示すには意志的動作かそうでないかがはっきりわかるようにかかれた絵カードを、自他のセットにして出すことが重要だと述べている。

上記 3 著の自動詞と他動詞の説明において、「動作主の意志の有無」「動作主の存在」の 2 点は自他を分ける重要なポイントとして捉えられている。

自他の違いを別の観点から述べているものもある。『考えて』では自動詞と他動詞を「動作主の意志の有無」「動作主の存在」ではなく、「結果と原因」という文言で説明している。以下は、『考えて』の説明である。

他動詞では主体がある動作を行うことを、自動詞ではその動作による変化を表します。つまり、他動詞が原因となり、自動詞がその結果を表すという関係になるわけです。このように、自他の動詞のペアは、原因と結果という因果関係で結ばれていることとなります。

そのほか、『ボイス』では、話し手が変化するものや人に注目している場合には自動詞を、話し手が変化を起こす人などに注目している場合には他動詞を用いると説明している。これは、話し手の視点の違いから自動詞と他動詞を説明しているものだと言えよう。また『ボイス』では、『考えて』と同様に行為の結果や変化に注目した場合に自動詞が使われるとの説明もある。さらに、

『step 式』、『ABC』と同様に他動詞の多くは意志動詞であるとの記述も見られる。

## 2. 日本語教師の自他の捉え方・教え方

一方、現場の日本語教師は自動詞と他動詞をどのように捉えているのだろうか。この点を明らかにするため、筆者は日本語学校・専門学校で日本語教育に従事している日本語教師 25 名を対象に、自動詞と他動詞の捉え方について、記述式のアンケート調査を行った。

### a. 調査方法

調査方法は下記の通りである。アンケート調査の被験者である日本語教師は関西の日本語学校や専門学校で主に大学進学のための予備教育機関で日本語を教える教師である。被験者の抽出には日本語教師としての教歴や年齢などは問わなかった。回答方法は、選択式ではなく自由記述とした。被験者には、「日本語の動詞の分類の一つに自動詞と他動詞があります。この点について質問します。」と前置きをしたうえで、「質問 1 あなたは、他動詞とはどのような動詞だと定義していますか。質問 2 学生から他動詞とは何かと質問を受けたら、どのように答えますか。質問 3 あなたは授業で自動詞と他動詞について扱いますか。」という 3 点について質問を行った。アンケートは無記名方式で行った。これは、記述者が特定されることを回答者の何人かが拒否したためである。無記名方式で行ったため、アンケートの記述に関し、追跡インタビューができなかった点を明記しておきたい。ただ、無記名方式にしたことによって、被験者の率直な考えを拾い上げることができたのではないかと考えている。

### b. 調査結果

次に、調査結果について述べる。回答は自由記述のため、筆者が各回答を項目別にまとめた。項目にまとめられない回答はその他とした。また、質問 1 と質問 2 に関して、各項目の回答総数が 25 を超えるのは、回答方法が自由記述であるため、回答者によっては多くの項目を挙げているためである。

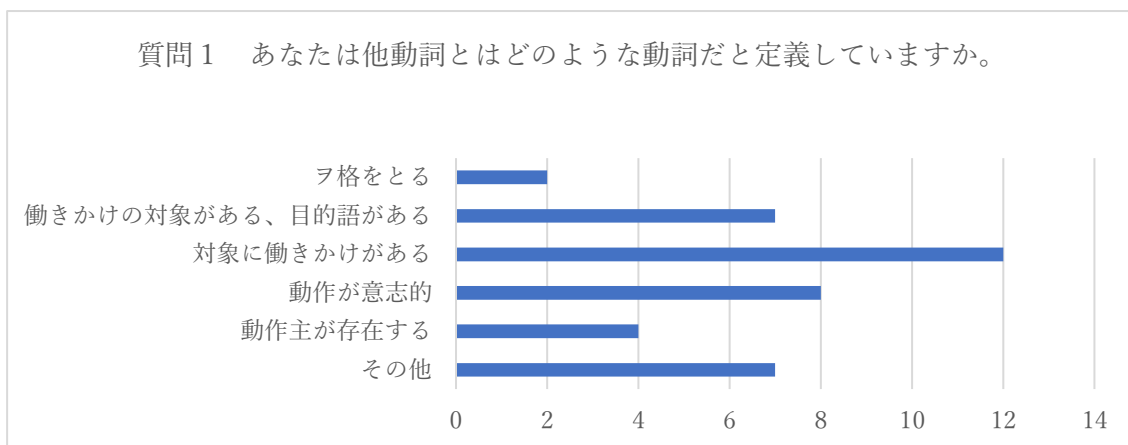


図 1 他動詞の捉え方についての回答

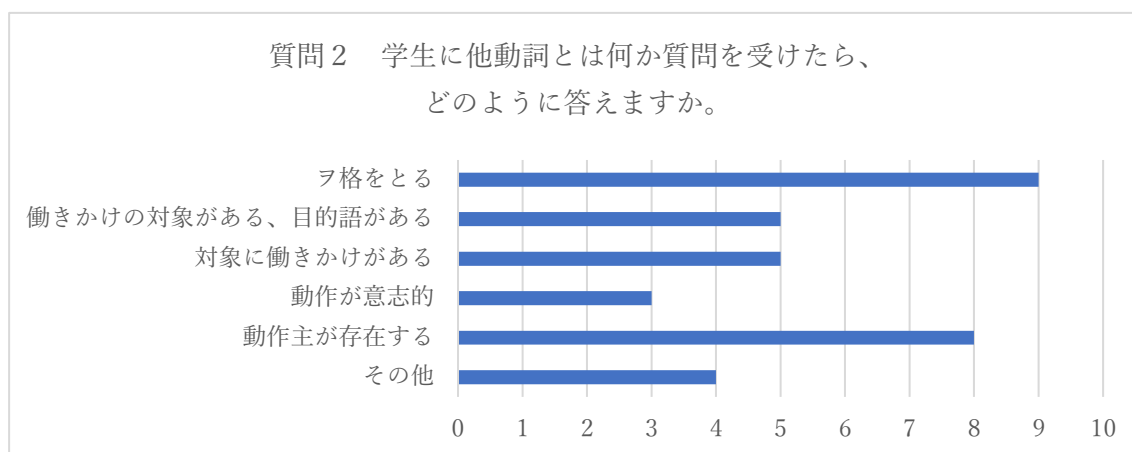


図2 学生に対する他動詞の説明についての回答

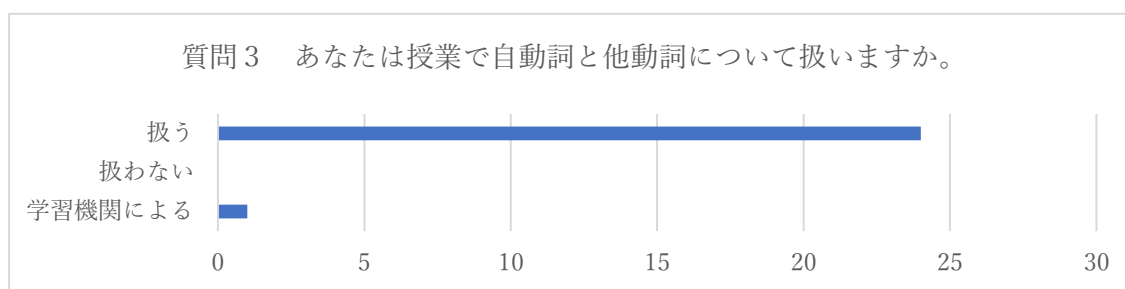


図3 授業で他動詞を扱うか否かについての回答

今回の調査で明らかになったことを挙げたい。まず、質問1の他動詞をどのように定義するか(図1参照)についてである。最も多い回答は、対象への働きかけである。次いで、働きかけの対象がある、動作が意志的であるというものである。働きかけがあるということは、そこには働きかけの対象が存在するはずであり、両回答を同一のものと捉えたとするならば、圧倒的に働きかけを他動詞の特徴として挙げることができよう。

次に、質問2の他動詞を学生にどのように教えるか(図2参照)である。学生にどのように伝えるかとなると、対象への働きかけという回答は減る。これは、自動詞・他動詞の提出が初級の半ばであり、対象への働きかけという言葉自体が学習者にとって分かりにくいためだと推察される。特に国内の日本語教育機関では、学習者の母語が様々であるため直接法が用いられる。その際に、教師はすでに学習した語彙や文型・表現のみで説明を行うため、働きかけという言葉は多くの教師にとって避けられるべき言葉なのだと思う。では、どのように説明されているのか。図2を見ると、ヲ格を取る動詞という統語的な説明を除けば、動作主が存在するという回答が最も多い回答となっている。つまり、働きかけという言葉を避け、その代わりに用いられた説明が、動作主の存在ということになる。しかし、働きかけがあることと動作主が存在することは一致す

る説明ではない。なぜなら、動作主が存在する自動詞もあるからである。この説明が学習者に与える影響については「Ⅳ. 日本語教師が挙げた他動詞の定義について」の章で後述する。

最後に、自動詞と他動詞の扱いについて（図 3 参照）だが、1 名を除けば、全被験者が扱うと回答している。これは、今回アンケートを依頼したのが日本語学校・専門学校の日本語教師であり、その多くの学校が構造シラバスを主とした focus on form 型の教科書を使用していることも影響していると思われる。また、なぜ自動詞と他動詞を教えるのかという理由については次のような回答が見られた。最も多かった回答は、「自動詞と他動詞とでは意味・概念が異なる、違いを学習者が理解することが必要」（被験者 1、5、11、22 など）というものであった。次いで多かったのが、「初級の教科書で導入される『ている』の文型など、自他の区別が必要な文型が初級にあるため」（被験者 14）、「その概念を知っていることで文型導入が楽にできるものがある。」（被験者 17）、「『ておく』『ている』などの説明に必要なだと考えるため。」（被験者 18）など、今後導入される文型との関連性である。また、「『みんな日』など初級テキストに出てくるから。」（被験者 21）、「テキストに対照的な概念として出てくるから」（被験者 5）という回答もあった。

#### Ⅳ. 日本語教師が挙げた他動詞の定義について

今回の調査で、日本語教師が学習者に説明する際の他動詞の定義、特徴として「動作主の有無」「動作主の意志の有無」があることが分かった。また、この 2 点は日本語学習者及び日本語教師の参考書等にも用いられていることも分かった。

次に、この 2 つの点について、その正当性について考えたい。

##### 1. 「動作主の有無」について

###### a. 「動作主の有無」の問題点

「動作主の有無」について述べる。今回の調査で、自動詞と他動詞を説明する上で、日本語教師は動作主の有無を指導上の大きなポイントとしていることが明らかになった。以下は、日本語教師への調査（Ⅲ. 2）で得られた動作主の有無についての詳細な回答である。

「『誰かがする』を言いたいときに使う」と教えている。（被験者 4）

当該動詞の行為をする主体がある。（被験者 18）

動作主の存在。（被験者 19）

他動詞は人がする。自動詞は自然になる。人はしない。「ドアを開ける、人がします。ドアが開く。風でそうなります。（被験者 20）

自他のペアがあるものを例に出して、「開けます、私はドアを開けます。（ドアを開けるジェスチャーをつけて）」と言う。次に「開きます、ドアが開きます。（自動ドアなどの絵を見せながら）」と言う。（被験者 24）

自分を含め、誰か人が動作を行う。（被験者 25）

初級学習者の指導には、絵カードを用いた説明がよく見られるが、下記は自動詞と他動詞の違いを示す際によく用いられる絵の典型である。この絵のポイントは、動作主の存在の有無であり、この点を日本語教師は次のような説明で行うことが多いようである。

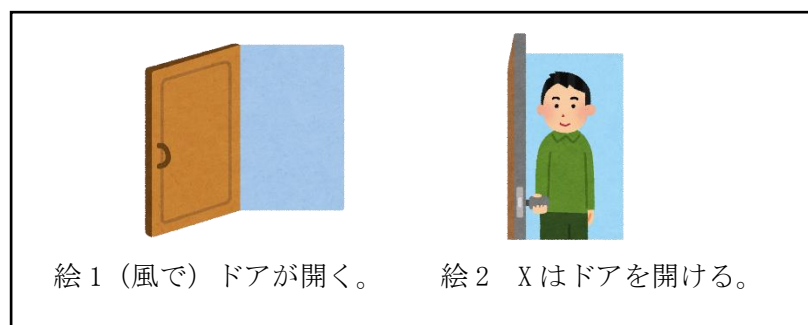


図 4 自動詞と他動詞を示す絵の例<sup>12)</sup>

教師は学習者に絵 1 を見せ、「誰もいません。とても強い風が吹きました。ドアが開きました。」と言い、次に絵 2 を見せる。教師は「人がいます。人はします。～さんはドアを開けました。」と言い、ある動作主のもと行われた動きが他動詞であり、動作主が存在しない自然発生的な動きが自動詞であると理解させるのである。

確かに、「(風で勝手に) ドアが開いた」／「x がドアを開けた」、他にも「(風で) 木が倒れた」／「x が木を倒した」のように動作主の存在の有無によって、自動詞と他動詞の違いの一端を理解させることはできるだろう。しかし、この提示ではその一方でこの提示方法が動作主の有無が自動詞と他動詞との違いであると学習者に認識させてしまう恐れがある。例えば、次のような文である。下記の用例は筆者が『現代日本語書き言葉均衡コーパス (以下、少納言コーパス)』<sup>13)</sup>から収集したもの及び筆者の作例である。

- ・(私は) トイレのスイッチがどれかわからず、適当につけたら、お風呂の電気がついた。(レタスクラブ 2005)
- ・家では問題が生じて彼氏が殴って、ドアが壊れたみたい。(yahoo ブログ 2008)
- ・父が頭上の木を長い棒で突くと、葉っぱがはらはらと落ちた。(作例)
- ・妹はローソクの火を消そうとしたが、火はなかなか消えなかった。(作例)

いずれの文において、「電気がついた」「ドアが壊れる」「葉っぱが落ちる」「火が消える」と自動詞で表されていることは、それぞれ「私」「彼」「父」「妹」という動作主が存在しているのである。これらの例文は、「動作主が存在しない」ことだけで自動詞を、「動作主が存在する」ことだけで他動詞を説明することの限界があることを示しているのではないだろうか。

#### b. 日本語学習者への自他選択クイズの実施及び結果

学習者は、自動詞と他動詞の違いにおいて、動作主の存在をどのように考えているのだろうか。筆者は、この点を明らかにするため、絵を用いた短文選択のクイズを本学で日本語科目を履修し



ている留学生 38 名<sup>14)</sup>に行った。

クイズは、「子供がケーキの上のローソクの火を一生懸命消そうとしているのに、その火がなかなか消えない」様子を表した絵<sup>15)</sup>を学習者に見せ、「この子供は、この後、①②どちらを言うと思いますか」と尋ね、「①ローソクの火が消えない。(自動詞) / ②ローソクの火が消せない。(他動詞・可能形)」の 2 つの表現を選択肢として提示した。その際、学生には「消える」は自動詞であり、「消せる」は他動詞の可能形だと説明している。

結果は、38 人中 31 人が他動詞の可能形である「消せる」を選択し、自動詞である「消える」を選択したのは 6 人に過ぎなかった。1 名は無回答であった。クイズの後、なぜその表現を選択したのかについても質問した。他動詞を選択した学生の回答で多かったのが、「自分で動作をして火を消しているから」、「自分がローソクの火を消しているから」「自分で吹いたから」、「自然発生的なことではないから」、「火は勝手に消えないから」、「自分の行動だから」というものであった。これは、今回の「ローソクの火を消す」という状況は動作主が存在しており、その動きが動作主の行動であれば他動詞を用いて、自然発生的なものにしか自動詞は使わないという日本語教師の自他の説明が影響しているのではないかと推測される。このクイズは日本語母語話者にも行ったが、25 人中 24 名が「ローソクの火が消えない」と自動詞を使うとしている。これは、話し手の視点が動作主である自分でなく、対象であるローソクの火に当たっていることから、対象の「ローソクの火」を主語にした自動詞文が用いられると考えられる。これは、II で挙げた「(鍵がかかかっていて、) ドアが開かない」と同じパターンの文である。

このクイズの結果は、動作主が存在している場合には他動詞を使用すると考える学習者が少ないことを示している。さらに言えば、「動作主の有無」に焦点を置いた日本語教師の説明に影響された、教師誘導による誤りだと考えられるのではないだろうか。

## 2. 他動詞と動作主の意志の関連性について

次に、他動詞と動作主の意志との関連性について述べたい。他動詞は動作主の意志が存在するという説明は日本語教師への調査 (III. 2) からも見られる。以下はその詳細な回答である。

動作主が意識的に動作を引き起こす (被験者 1)

主体の意志・決定を明確に表す動詞 (被験者 7)

人の意志で起こしたこと (被験者 12)

主語の人 (主体) が何らかの意志があつてする動詞 (被験者 15)

人の意志的な行為を表す動詞 (被験者 17)

誰かが意識的に何かをしたこと位で生じる動作動詞 (被験者 21)

意図的にした動作 (被験者 23)

教師への調査 (III. 2) において被験者 25 名のうち 7 名の回答に他動詞と動作主の意志の関連

性についての記述が見られる。これは、先に挙げた動作主の有無に次いで他動詞の特徴として多いものである。被験者 12、17、21、23 に至っては、動作主の意志の有無が他動詞の最大の特徴として回答している。

#### a. 「他動詞と動作主の意志の関連性」の問題点

筆者は他動詞と話し手の意志の関係については否定的な立場である。他動詞とは、動作主（ガ格名詞）が対象（ヲ格名詞）に働きかけをしている動詞であり、他動詞自体が動作主の意志の有無を示すものではないと考えているからである<sup>16)</sup>。

- a. 私は野菜を切った。
- b. 私は指を切った。
- c. 父は昨年から肺を患っている。
- d. 花子は顔を赤らめた。

上記の例文は、いずれもヲ格を伴う他動詞文と判断されるが、動作主の意志の有無という観点においては、aを除いては意志がないと判断される。日本語母語話者 25 人に動作主の意志の有無を聞いたところ、同様の回答を得ている。

確かに、c と d はどのような場合においても、動作主の意志はないが、b はどうだろうか。動作主の意志がどのような場合においてもないと言えるだろうか。

・足を洗うときにけじめとして小指を切るシーンを見たことがあります。本物のやくざも小指を切ったりするんですか。(2005 yahoo ブログ：少納言コーパスから)

・江戸の遊郭の遊女たち。当然不特定多数の客との肉体関係を持っていましたが、本気で好きとなった客に対して不変の愛を誓うということの証明として、小指の第一関節から先を切り落として、相手に渡したそうです。(http://billionaire-wolf.com/2016/12/10/yubikiri/)

この2つの用例の「指を切る」という動作は動作主の意志があると判断される。日本語母語話者への調査においても動作主の意志があると答えている。

このような例から、日本語において他動詞とはあくまで動作主から対象への働きかけを示しているのであって、動作主の意志の有無は示していないと筆者は考えている。そのため、「指を切った」のような動作主の意志が明確でない場合は「わざと」「うっかり」など意志の有無を明確にする副詞や「～てしまった」のようなモダリティー表現が付加されるのである。

ただ、動作主から対象への働きかけがあるということは、多くの場合、動作主の意志のもと行われるため、結果として働きかけがある他動詞は動作主の意志を伴っていると解釈されているのだろう。つまり、日本語教育においても使用される意志動詞という名称は、正確に言えば、「動作主の意志があると判断されることが一般的である動詞」と言うべきものなのである。また、他動詞の中には「赤らめる」のように働きかけがあるが、動作主の意志はないと絶対的に解釈されるものもある。

以上の点から、筆者は他動詞と主体の意志との関連性は絶対的なものではなく、他動詞は動作主の意志があるという説明は、日本語学習者の誤用を誘発してしまう可能性があると考えている。

#### b. 他動詞と動作主の意志をめぐる学習者の誤用例

実際に、他動詞は動作主の意志があると認識しているために起きた日本語学習者の誤用を挙げる。

他動詞と動作主の意志の誤用に関するものとして、彭 (1992)<sup>17)</sup>がある。彭は、中国人学習者 30 名に「私は妻をなくした」という文の意味を聞いたところ、正しい解釈をした学生は一人もおらず、22 名が「私は妻を殺した」と誤った解釈をしたと述べている。これは、被験者である中国人学習者が他動詞は動作主の意志が存在するという認識から、「妻をなくす」を「妻をなくそう」と解釈し、その結果「妻を殺した」と意味理解したのである。

他にも、山田 (2002)<sup>18)</sup>が他動詞と動作主の意志に関する誤用を指摘している。その例として、山田は「陳さんの顔を見て、用事が思い出した。(韓国・学習時間 300 時間程度)」という韓国人学習者の誤用を挙げている。この学習者がガ格を使用した理由を、「この文は陳さんが思い出そうとしたのではありません。陳さんは自然に思い出した、という自動詞の文です。ですから『が』にしました。韓国語でも『が』を使います。」と述べたと述べている。つまり、この学習者は他動詞には動作主の意志が存在すると解釈していた結果、無意志である「思い出す」は他動詞ではなく、自動詞であると判断しガ格を使用したのである。この誤用は、母語の干渉として、韓国人学生に多く見られるのかもしれない。下記は、日本語学習者作文コーパスから収集した韓国人の中級学習者による誤用である。

・そのように日本語をはじめようという考えをして、勉強をはじめようとしたのになんかまったくわからなかった。それで勉強をしながら楽しまれることはドラマを見ることが思い出したので見はじめた。(韓国・中級)

韓国語では、「思い出す」は日本語の「が」に相当する後置詞を使用するため同様の誤用は多く見られるようである。

このように考えると、「動作主の意志の有無」や先に挙げた「動作主の存在の有無」を他動詞の特徴として学習者に説明することは、学習者のアウトプットに影響を与える可能性があることを示唆している。

## V. まとめと提言

本稿では、日本語教師の他動詞についての捉え方や指導法が学習者の自動詞と他動詞の使用にどのような影響を与えているのか、アンケートなどを用いて、調査・考察を行った。最後に、今回の調査で明らかになった点をまとめ、自動詞と他動詞の指導についての提言をしたい。

### 1. 今回の調査で明らかになった点

- ・日本語教師は、他動詞とは「働きかけがある動詞」であると認識しているが、指導においては「動作主が存在する動詞」「動作主の意志がある動詞」と説明している。
- ・日本語教師用・学習者用参考書において、他動詞とは「動作主が存在する動詞」「動作主の意志がある動詞」としている記述も散見される。
- ・日本語学習者は中・上級であっても、自動詞と他動詞の選択の際、「動作主が存在している場合は、他動詞を使用する」と解釈している者が多い。
- ・日本語学習者の「動作主が存在している場合は他動詞を使う」という解釈は、「ローソクの火が消えない」と言うべきところを、「ローソクの火を消せない」とする誤用を誘発している可能性がある。

## 2. 提言

確かに、初級という学習者の状況を考えれば、限られた語彙や文法のみを使って自動詞と他動詞の概念を説明するのは難しい。しかし、このような状況の中でも改善できる点は存在する。最後に指導の提言を記す。

それは、自動詞は動作主が存在しない自然発生的な動きであり、他動詞は動作主が存在する動作主による動きという説明は避けることである。それに代わる説明として、『ボイス』でも述べられていた話し手の視点に重きを置いた指導、具体的に言えば動作主に視点を置いた動きが他動詞であり、対象に視点を置いた動きが自動詞であるという教え方をしてはどうだろうか。図5は、その説明に用いる絵の一例である。自動詞を使う場合も、他動詞を使う場合も、あえて同じ状況を提示し、話し手の視点が対象に向いているのか、それとも動作主に向いているのかを示している。また、他動詞「電気をつける」を見せてから、自動詞「(その結果、) 電気がつく」を見せることによって、『考えて』で述べられている原因と結果を表すことも可能ではないだろうか。決して、この絵の提示は目新しいことではないかもしれないが、学習者の自動詞と他動詞の理解促進に少しでもつながる簡単な方法として挙げておきたい。

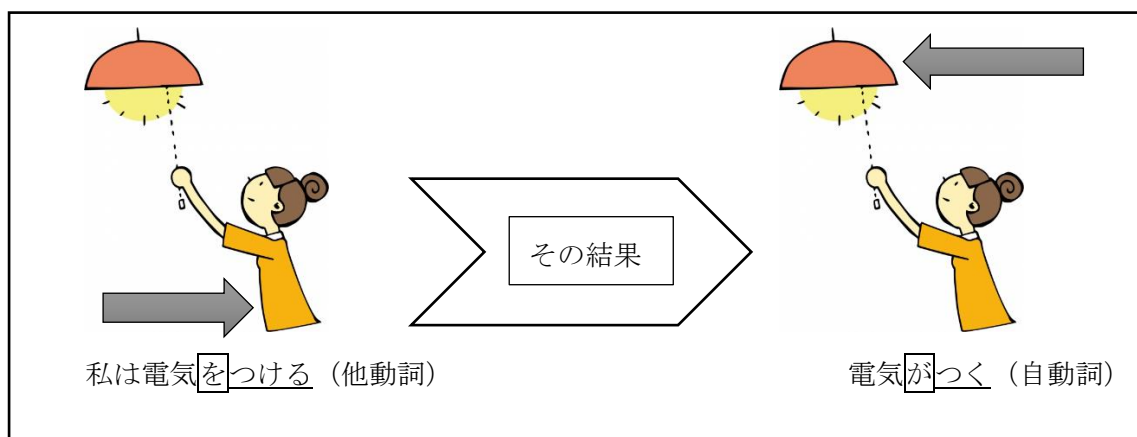


図5 視点・原因と結果で自動詞と他動詞を示した絵<sup>19)</sup>

### 3. 最後に

筆者は日本語教師として日本語学校の教壇に立ったばかりのころ、ある先輩日本語教師から「自動詞と他動詞なんて学生は日本にいるうちに自然と身につくから」と言われたことを今でも覚えている。しかし、今回の学習者の誤用や自他のクイズ結果を見ても、自動詞と他動詞の選択は日本で何年か生活したからといって身につくものではないことは明らかである。日本語教師は授業において、限られた時間の中で、尚且つ、学習者の理解できる僅かな語彙のみを使用し、難しい文法項目を指導しなければならない。しかし、このような大変さや煩わしさなどからつい端折った説明をしてしまえば、学習者の理解やアウトプットに大きな影響を及ぼすということを、筆者自身への教訓として最後に記しておきたい。

引用注釈、注、参考文献

- 1) 本稿において自動詞と他動詞の指導というのは、主に「あく」と「あける」、「つく」と「つける」のような有対動詞において自動詞と他動詞の使い分けに関する指導項目を指す。
- 2) 日本語学校で使用されている主な初級日本語教科書を見ると、『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）では 29 課（全体は 50 課）に、『げんき』（Japan Times）が 18 課（全体は 23 課）に、『学ぼう！にほんご』（専門教育出版）では 20 課（全体は 40 課）で扱われている。
- 3) 大関浩美：「第 1 章第二言語習得理論とは」、『日本語を教えるための第二言語習得理論』（2010）、5-6。
- 4) 日本語学習者作文コーパス (<http://sakubun.jpn.org>) を利用。
- 5) 日本語学習者作文コーパスでは、自動詞と他動詞の誤用といった検索はできないため、コーパス上の作文から筆者が自動詞と他動詞の誤用だと判断している。
- 6) 学習時間 150 時間修了程度の中国人学生の誤用。
- 7) 日本語学校の日本語教師に聞いたところ、自動詞と他動詞の形態の規則について扱うことはあまりないようである。これは、規則自体が複雑であることや学習者が知っている動詞の数が少ないため規則に該当する自他の例を提示できないためだと思われる。
- 8) 山田一美、山田勇人：「漢語サセル動詞に関する一考察」『大阪女学院短期大学紀要』39（2009）、19-29。
- 9) 「筆」が明記された日本語学習者の誤用例は、筆者が収集したものであることを示している。
- 10) 市川保子編：『日本語誤用辞典』、スリーエーネットワーク、（2010）、342。では、誤用のパターンを 3 つに分類している。「ドアが開けない」の誤用について、『自動詞+ない』で不可能の意味を表す場合が多いが、そのことが分かっていないために生じた誤用」と誤用の 1 つのパターンとしている。しかし、筆者はこのタイプの誤用も、(b) 自動詞を使用すべき箇所に他動詞を使用している誤り、またはその逆の誤りとしている。
- 11) ( ) 内の文言は筆者が付け加えたものである。
- 12) 絵は「かわいいフリー素材集いらすとや (<https://www.irasutoya.com>)」を使用。
- 13) 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」プロジェクトによって共同で開発された『現代書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ：Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese）
- 14) 留学生は、ベトナム、中国、スリランカ、バングラディッシュ、モロッコ、香港の出身である。母語による違いについては顕著な差は見られなかった。
- 15) 本稿では著作権上の問題から絵を掲載していないが、実際のクイズでは「子供がローソクの火を吹き消そうとしているが、その火がなかなか消えない」様子を表したイラストを学生に提示している。
- 16) 山田勇人：「日本語における他動詞と主体意志の関係について」、『京都外国語大学 言語と文化』10、（2016）49-57。
- 17) 彭飛：「非意図的行為を示すマイナスの意味の他動詞文の特徴」『外国人を悩ませる日本人の言語慣習に関する

る研究』和泉書院（1992）77.

<sup>18)</sup> 山田勇人：「無意志ヲ格動詞文の研究」，拓殖大学大学院言語教育研究科修士論文，（2002），55-56.

<sup>19)</sup> 絵は「無料のイラスト IMT (<https://illust-int.jp/archives/001044>)」を使用。